

深山の秋

小川未明

青空文庫

秋も末のことでありました。年老つたさるが岩の上に着くまで、ぼんやりと空をながめていました。なにかしら心に悲しいものを感じたからであります。夏のころは、あのよういきいきとしていた木の葉が、もうみんな枯れかかっています、私たちの身の上にもやってくるであろう、永い眠りを考えたのかもしれない。たとえば、はつきりと頭に考えなくとも、一時にせよ、その予感に囚えられたのかもしれない。いつになく、遠い静かな気持ちで、彼は、雲のゆくのをじっと見守っていました。

夕日は、重なり合った、高い山のかなたに沈んだのであります。さんらんとして、百花の咲き乱れている、そして、いつも平和な楽土が、そこにはあるもののごとく思われまいた。いまでも、サフランの花びらのように、また石竹の花のように、美しく散った雲を見ながら、哀れな老いざるは、しかし、自分の小さな頭の働きより以上のことは考えることができませんでした。

「あの先にいくのは、山にすんでいるおおかみくんに似ているな。そういえば、つぎにくのは、あの大きいまくんか、その後から、旗を持っていくのは、いつか森であったきつねくんによく似ている。」

そう思つて、雲の姿をながめっていると、自分の知るかぎりの山にすむ獣物も、小鳥も、みんな空の雲の一つ一つに見ることができるのであります。それらは、楽しく、仲よくして、神さまの前に遊んでいました。

彼は、この不思議な有り様を、岩の上でじつと見上げていました。

「ああわかった。私も年を老つたから、せめて達者のうちに、一度、みんなとこうして遊んでみよと、神さまがおつしやるにちがいない。」

こう思いつくと、老いざるは、悲しそうに一、声高く、友だちを呼び集めるべく、空に向かつて叫んだのです。

いつしか、空の雲は、どこへか姿を消してしまいました。もし、気がつかなかったら、永遠に知られずじまつたような、それは、はかない天の暗示でありました。

老いざるの叫び声をききつけて、すぐにやってきたのは、近くのくるみの木に上つていたりすであります。

「どうしたのですか、さるさん、なにか変わったことでも起こつたのですか？」と、ききました。

この年老つたさるは、この近傍の山や、森にすむ、獣物や、鳥たちから尊敬されて

いました。それは、この山の生活に対して、多くの経験を持つていたためです。

「おいぎるは、まず、りすに向かつて、いましがた見た雲の教訓を物語りました。

「それは、すてきだった。みんな集まって、雪の降らないうちに仲よく遊んだらいいと神さまはおっしゃるのだ。」と、おいぎるは、諭すようにいいました。

「ほんとうに、いいことですが、平常私たちをばかにしているくまや、おおかみさんが、なんといいますかしらん。」と、りすは、小さな頭を傾けました。

「私が、いまここで見た、雲の話をすれば、いやとはいわないだろう。」と、おいぎるが、答えました。

「じゃ、さるさん、早く、懇親会を開いてください。私が、小さいのでばかにされなければ、こんなうれしいことはありません。」と、りすは、喜んで飛び上がりました。

そこへ、のっそりときつねがやってきました。

「さるさん、なにか変わったことがあったのですか。あなたの呼び声をきいて、びつくりしてやってきました。」と、ずるそうな顔つきをしたきつねがいました。しかし、このときだけは、きつねもまじめだったのです。

「おいぎるは、いま見た雲の話をしました。」

「きつねさん、あなたは、旗を持って、その行列の中に入っていましたよ。私たちがやるときにも、どうかあのようにしてください。」

これをきくと、きつねは、そり身になつて、

「あ、私も、ここにいて、その雲を見るのだった。いままで、竹やぶの中で、眠つてしまいました。あなたの声をききつけて、びっくりして目をさましたのです。」といいました。老いぎるは、ふたりに、使いを頼みました。きつねは、洞穴にいるくまのところへ、そして、りすは、谷川のところで獲物を待っているであろうおおかみのところへいくことにしました。

りすは、いきがけに、老いぎるを振り向きながら、

「ぶどうは、すこし過ぎたが、まだいいがあります。かきもなっているところを知っていますし、くりや、どんぐりや、山なしの実など、まだ探せばありますから、かならずい宴会ができません。なんといつても、これから、長い冬に入るのだから、うんと一日みんなで仲よく遊びましょうよ。だいいち、この山にすむものの好みですから、おそらく不賛成のものはありますまい。」といいました。

同じく、異つた道の方へいきかけたきつねは、

「そうとも、たとえ人間ほどに道理がわからなくとも、俺たちにだって義理はあるからな。」といいました。

「人間の義理なんて、あてになるもんじやないよ。」と、りすが、小さな頭を振りしました。

「そんなことはない。」と、きつねは、人間の弁護をしました。

「じゃ、律義もののくまや、勇敢なおおかみが、人間を助けたことはあるが、人間は、どうだ、くまや、おおかみを見つけたが最後殺してしまうだろう。」と、やつきになつて、りすがいい張りました。

すると、老いざるは、笑いながら、

「こんどは、人間ともお友だちになろうさ。」といいました。

「そういうさるさんだつて、人間からは、さる智慧といて、けつして、よくはいわれ
ていませんぜ。」と、りすがいうと、さるがさるもきまりの悪そうな顔つきをしました。

「そんな話はどうだつていい。まあ、早くいつてこよう。」と、きつねがいったので、り
すは、一飛びに谷の方へ駆けていきました。

峠の上には、一軒の茶屋がありました。夏から秋にかけて、この険しい山道を歩いて、

山を越して、他国へゆく旅人があつたからですが、もう秋もふけたので、この数日間というものまったく人の影を見なかつたのであります。

茶屋の主人は、家族のものをみんな山から下ろしてしまつて、自分だけが残り、あとかたづけをしてから山をおりようとしていました。雪が見えて、また来年ともなつて、木々のこずえに新しい緑が萌し、小鳥のさえずるころにならなければ、ここへ上がつてくる用事もなかつたのでした。彼は、費い残りのしようゆや、みそや、酒や、お菓子などの始末もつけないければならぬと思つていました。

「また、きょうも人の顔を見なかつたな。」

そのとき、障子の破れ目から吹き込んだ風は、急に寒くなつて身に浸み入るのを覺えたのでした。

「どこか、近くの山へ雪がやつてきたな。」と、主人は、思いました。そして、明日の朝にでも、外へ出て、あちらの山を見たら、白くなつているであろうと、その山の姿を目に想像したのでした。音ひとつしない、寂然としたへやのうちにすわっていると、ブ、ブツという障子の破れを鳴らす風の音だけが、きこえていました。

「去年も、この月半ばに山を下りたのだが、今年は、いつもより冬が早いらしい。」

と、主人は、立つて、窓の障子を開けて、裏山の方をながめました。

夕日は、もう沈んでしまつて、怖ろしい灰色の雲が、嶺の頂からのぞいていました。

このとき、キイー、キイーとさるのなき声でしたので、彼は、雪が降つて、山奥からさるが出てきたのを知りました。そして、まだ鉄砲の手入れをしておかなかつたのを、迂闊であつたと気づいたので、その翌日、昼すぎごろのこと、入り口へなにかきたけはいがしたので、見ると怪物が顔を突き出していました。主人は、びつくりして、声も立てられずにしりもちをつきました。なぜなら、意外にも大きなくまだつたからです。

彼は、もう命がないものと思ひ、体じゅうの血が凍つてしまいました。

「どうぞ、お助けください。」と、心の中で、ひたすら神を念じたのでした。

けれど、くまは、すぐに飛びかかつてはこなかつた。かえつて、なにか訴えるような目つきをして、手にはかきの木とまたたびのつるを握つていました。そして、いよいよくまが、彼に危害を加えるためにやつてきたのではないことがわかると、

「命さえ助けてくれたら、なんでもきいてやるが。」と、おそれるおそれる顔を上げて、彼は、くまのすることを見たのでありました。くまは、さも同意を求めするように、ただちに、酒だるの前にきて、じつとそれに見入つていたのです。

「ははあ、酒がほしくて、やってきたのか。」と、主人は悟りました。

「もし、俺が、酒をやらなければ、くまは、きつと怒って、俺をかみ殺すにちがいない。

どのみち敵だ！ いっそたくさん酒を飲ませて、酔いつぶしてから、やつつけてしまおうか？」

主人の頭の中には、この瞬間、すさまじい速度で、さまざまな考えが回転しました。

「ばかな、この大きなくまに思う存分、酒を飲ませるなんて、そんな酒がどこにあるか。神さまは、この瀬戸際で、俺が、どれほどの智者であるか、おためしなされたのだ。まず、この高い酒をやらぬ工夫をしなければならぬ。」

彼は、もうすっかり打算的になつていました。たなの上から徳利を下ろして、奥へ持つてはいると、やがてもどつてきてたるの酒をうつすようすをして、徳利を振ってみせました。酒が、チョロ、チョロと音をたてて鳴りました。くまは、信するもののように、おとなしくしていましたが、やがて持つてきた、かきとまたたびをそこへ捨てると、徳利を抱えるようにして、まるまる肥ったからだで、前の山道を後をも見ずに、駆けて去りました。

長年山に住んでいて、動物にも情けがあり、また礼儀のあることを聞いていた主人は、くまが、酒を買いにきたのだということだけはわかったのです。

「なにか、山の中で、動物たちの催しでもあるのかもしれない。」と、思いました。

それよりか、自分が、損をせずに、うまく危険から脱れたことを喜んだのでありました。「長く山にいと、ろくなことはない。早く村に下りよう。」と、主人は、考えました。

この日、山の動物たちは、老いざるの指揮に従って、行列を整えて、嶺から嶺へと練って歩きました。先頭には、かわいらしいうさぎが、つぎにおおかみが、そして、徳利を持つたくまが、きつねが、りすが、という順序に、ちようど、さるが、岩の上で見、天、上の行列そのままです。ことに人間が、足跡を絶つてから、まったく清浄となった山中で、彼らは、あわただしく暮れていく、美しい秋を心から惜しむごとく、一日を楽しく遊んだのでありました。やがて、彼らの列がある高い広場に達したときに、かつて天、上の神々たちよりほかには知られていなかった芸当をして、打ち興じたことであります。

そのころ、峠の茶屋の主人は、そそくさと山を降りる仕度をしていました。酒だるの上には、くまが置いていった、かきや、またたびまで載せてありました。村へ帰ってから

の、自慢話にするのでしよう。そして、もう来年の夏の客があるまでは、この小舎にも用がないといわぬばかりに、閉めきつた戸の一つ一つに、ガン、ガンとくぎを打ちつけていました。彼は、金鎚をふり上げながら、

「酔に水を割つて入れてやったが、獣物たちは、酒の味がわかるまいから、たぶん人間は、こんなものを飲んでいると思ふことであろう。それとも酒でないと悟るだろうか？」

山は静かであり、木々の紅葉はこのうえもなく美しくあったが、独り彼はなにか心におちつかないものを感じたのでした。峠を降りかけると、ざわざわといつて、そばの竹やぶが鳴つたので、くまが、復讐にやってきたかと足がすくんでしまった。しかし、それは、西風であつて、高い嶺を滑つた夕日は、雪をはらんで黒雲のうず巻く中に落ちかかつていたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「真理」

1935（昭和10）年12月

※表題は底本では、「深山《しんざん》の秋《あき》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

深山の秋

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>